

民国期中学国語教科書のなかの 『三国志演義』

— 教材化と作品評価について —

大橋 義武

1. はじめに

白話小説『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『紅樓夢』は、「四大名著」とも称され、今日では中国古典文学の傑作としての地位を揺るぎないものになっている。しかしそもそも近代以前の中国においては、白話小説というものの自体がまともな「文学」とはみなされておらず、上の四作品もその例外ではなかった。この間にある溝の大きさを考えれば、近代（主に 20 世紀）における白話小説の受容と評価が重要な意味を持っていたであろうことは比較的容易に理解できる。実際、前段にあたる清末「小説界革命」を経て、1910 年代の「文学革命」を契機として中国で「小説」（とりわけ「白話小説」）の社会的な地位が高まったことは、夙に指摘されてきた。しかし、「新文学」に関してはともかく、すでに存在していた作品（上述のような旧小説）についてもそのように認めることができるのだろうか。この点に関する研究は、これまで必ずしも十分ではなかった。

そこで筆者はまず『三国志演義』¹ という作品に注目し、20 世紀前半における旧小説作品の文学史的評価の問題を考察した²。筆者自身の整理によれば、『演義』が近代中国の知識人たちによって同時代の思想的・文化的課題と絡めて論じられた最初の「場」は、雑誌「新青年」誌上であった。新文化運動の旗手でもあった胡適と錢玄同が、文学をめぐる同誌上での討論の中で明・清の白話小説の近代における価値について論じ、その中で『演義』にも言及していたのである。彼らは『演義』の文学作品としての価値はさほど高く評価しなかったが、他方で『演義』が広く読まれ人々に影響を与えてきた作品で

¹ あるいは『三国演義』と呼ばれることもある。以下適宜『演義』とも称する。なお「国」と「國」のように異体字のある場合、小論では原則的に常用漢字等現在日本で一般に通用している字体を用いる。

² 拙稿「近代中国における『三国演義』について——文学史的評価の問題を中心とした考察」（『三国志研究』4号、2009年9月）。

あることは認めた。次いで彼らは、「今後」は『演義』がどう読まれるべきかについて、それぞれの主張を行った。胡適は『演義』自体の文学的価値はほぼ否定しつつ、専らその文学史上の意義を評価した。『演義』は、彼の構想する「白話文学の歴史」としての中国文学史の中に位置付けられたのである。一方の銭玄同は、『演義』を二流の文学としつつも、それをフィクションとして受け取る限りは益もあるとし、特に白話小説としては文言の要素が多いことから「古文」学習に資するのではないかと説いた。彼らは揃って亜東図書館刊の新式標点本『三国演義』³に「序文」を寄せたが、この亜東版の刊行は、『演義』が近代中国の読書界に地位を占める上で画期的な出来事でもあった。

更にもう一つ注目すべきことは、教育上の用途から導かれる白話小説の価値である。銭玄同が「古文」（文言）学習の教材としての『演義』の価値を示唆してもいたが、この点については当時の国語教育の改革という大きな流れの中でとらえる必要がある。国語教育の口語化が課題であった1920年代前半当時において、旧白話小説が教材として活用できるのか否かということは、議論の焦点の一つになっていた⁴。

そして教材ということでまず注意すべきなのは、学校教科書である。筆者は以前、中華民国期の中学用国語教科書六十種余りを調べ、明・清の白話小説がどれだけ教材に採り入れられていたのか調査した⁵。その時に明らかになったことを確認しておこう。(1)『水滸伝』『儒林外史』『鏡花縁』等、いまでいう古典小説名著は教科書にしばしば採り入れられていた。(2)採り入れられる箇所にも傾向（偏り）があり、『水滸伝』では「景陽岡武松打虎」、『儒林外史』では「王冕」等が定番教材となっていた。(3)教科書への採用が希な作品もあり、『紅樓夢』『西遊記』『三国志演義』は比較的少なかった。

今回は『三国志演義』に絞って教科書の内容の分析に進み、具体的な検討を試みる。『演義』のどのような場面が、いかなる理由づけによって、教材に採用されたのか。教育上の用途から発想された「名場面」の選定とその論理に迫ることで、民国期中国における『演義』評価の様相を多少なりとも明らかにしたい。

³ 上海の出版社である亜東図書館は、1920年の『水滸』を皮切りに、いくつもの白話小説名著に新式標点と分段を施して刊行した。『三国演義』は1922年が初版である。以下この出版社の『三国演義』を適宜「亜東版」とも称する。

⁴ この点に関しては拙稿「1920年代の国語教育思想と白話小説」（『年報地域文化研究』15号、2012年3月）を参照。

⁵ 詳細は拙稿「民国期中学国語教科書と明清白話小説——資料整理と初歩的考察」（『現代中国』85号、2011年3月）を参照。

2. 中学国語教科書の中の『三国志演義』

筆者が調べることでできた中学用国語教科書⁶のうち、『三国志演義』をその中に含んでいるものを以下の表に掲げる。表は刊行年の順に並んでおり、一つの教科書の中で複数の異なる場面を載せている場合は分けて記載している。

[表 初級中学国語教科書に採用された『三国志演義』一覧]

	書名	出版社 ⁷	編者	刊行年	題目（採用箇所） ⁸
①	『現代初中教科書国語』第6冊	商務	荘適	1930	「劉備三顧諸葛亮」 （第37回・第38回）
②	『新学制中学国文教科書初中国文』第5冊	南京	江蘇省立 中学国文科 會議聯合 會	1931	「火烧赤壁」 （第48回・第49回・ 第50回）
③A	『開明国文読本』第1冊	開明	王伯祥	1932	「孫策太史慈神亭之 戰」 （第15回）
③B	『開明国文読本』第1冊	開明	王伯祥	1932	「関羽刮骨療毒」 （第74回・第75回）
③C	『開明国文読本』第2冊	開明	王伯祥	1932	「諸葛亮舌戦群儒」 （第43回）
④	『復興初級中学教科書国文』第2冊	商務	傅東華	1933	「楊修之死」 （第72回）
⑤A	『初中国文選本』第5冊	立達	羅根沢・ 高遠公	1933	「青梅煮酒論英雄」 （第21回）
⑤B	『初中国文選本』第5冊	立達	羅根沢・ 高遠公	1933	「雪中訪賢」 （第37回）

⁶ 合計六十四種類に及ぶ（詳細は注5の拙稿を参照）。なお、小学校でなく中学校（初級中学）の教材を分析対象としたのは、当時の中等国語教育は文学教育の導入段階にあたり、「文学」としての小説の扱いを見るのに適しているからである。（なお、初等国語教育は言語習得を主な目的としていた。）

⁷ この表では略称を用いている。「商務」は商務印書館、「南京」は南京書店、「開明」は開明書店、「立達」は立達書局、「大東」は大東書局、「世界」は世界書局、「中学生」は中学生書局、「大華」は大華書局、「貝満女子」は貝満女子中学校、「中華」は中華書局、「教育総署」は教育総署編審会、「七家聯合」は国定中小学教科書七家聯合供応処、「台湾」は台湾書店、「新華」は新華書店を表す。

⁸ 「題目」は文章（作品）にその教科書が付いている名称。「採用箇所」は、他との比較を可能にするために、『三国志演義』の第何回から引かれてきているかを示したもの。こちらは、当時広く普及していた全120回の叢東版（汪原放句読『三国演義』叢東図書館、1922年初版、1924年第3版）によって文章を調べ、採用箇所を特定した。

⑥	『新生活初中教科書 国文』第1冊	大東	周 祐・黄 駿如	1933	「群英会」 (第45回)
⑦A	『朱氏初中国文』第 5冊	世界	朱劍芒	1934	「隆中決策」 (第38回)
⑦B	『朱氏初中国文』第 5冊	世界	朱劍芒	1934	「先主託孤」 (第85回)
⑦C	『朱氏初中国文』第 5冊	世界	朱劍芒	1934	「火焼赤壁」 (第48回・第49回・ 第50回)
⑧	『初中当代国文』第 6冊	中学生	江 蘇 省 教 育 庁	1934	「火焼赤壁」 (第48回・第49回・ 第50回)
⑨	『実験初中国文読 本』第3冊	大華	沈栄齡等	1934	「火焼赤壁」 (第49回・第50回)
⑩A	『初中国文教学自修 用国文百八課』 ⁹ 第1 冊	開明	夏 丐 尊 ・ 葉紹鈞	1935	「孫策太史慈神亭之 戦」 (第15回)
⑩B	『初中国文教学自修 用国文百八課』第1 冊	開明	夏 丐 尊 ・ 葉紹鈞	1935	「楊修之死」 (第72回)
⑪	『初中国文教本』第 1冊	貝 満 女 子	陳介白	1937	「楊修」 (第72回? ¹⁰)
⑫	『新編初中国文』第 4冊	中華	宋文翰	1937	「楊修之死」 (第72回)
⑬	『初中国文教本』第 1冊	開明	夏 丐 尊 ・ 葉紹鈞	1937	「神亭之戦」 (第15回)
⑭	『初中国文』第4冊	教育 総 署	教育部 編 審会	1939	「楊修之死」 (第72回)
⑮A	『初級中学国文甲 編』第1冊	七 家 聯 合	教育部	1946	「火焼赤壁」 (第48回・第49回・ 第50回)
⑮B	『初級中学国文甲 編』第1冊	七 家 聯 合	教育部	1946	「群英会」 (第45回)
⑯A	『開明新編国文読本 (乙種本)』 ¹¹ 第1冊	開明	葉 聖 陶 ・ 郭紹虞等	1946	「楊修之死」 (第72回)
⑯B	『開明新編国文読本 (乙種本)』第1冊	開明	葉 聖 陶 ・ 郭紹虞等	1946	「赤壁之戦」 (第45回から第50回 までのあらずじ)

⁹ この教科書については、原本ではなく復刻版(夏丐尊・葉紹鈞編『国文百八課』生活・読書・新知三聯書店、2008年)を参照した。

¹⁰ この教科書については、目次のみしか見ることができていない。「楊修」は他の教科書でも定番となっており、「第72回」からと推定されるためこのように記述した。

¹¹ この教科書については原本ではなく復刻版(葉聖陶等合編『開明新編国文読本』(全3冊)経済日報出版社、2000年)を参照した。

⑰	『初級国語文選』	台湾	台湾省行政長官公署教育処	1946	「草船借箭」 (第46回)
⑱	『初中国文』第2冊	新華	王食三等	1949	「草船借箭」 (第46回)

まず、以上の時系列の整理からわかることを確認しておきたい。これによると十八種の教科書が『三国志演義』を教科書本文として採用している。これは、例えば『儒林外史』からの採用をしている教科書が四十二種、『水滸伝』からの採用をしている教科書が二十九種に及ぶ¹²⁾のと比較すると、多くはない。また教科書採用の時期にも注目してみると、最も早い『現代初中教科書国語』（商務印書館）で1930年であるが、これも『儒林外史』が1920年¹³⁾、『水滸伝』が1924年¹⁴⁾であったのと比べると遅い。

とはいえ刊行元を見るとわかるように、ごく一部の限られた出版社のみが『三国志演義』を使ったというわけではない。民国当時の教科書大手である商務印書館・中華書局・世界書局をはじめ多様な出版社がこの小説を教科書に採り入れている。教材としての有用性は広く認識されていったとみてよいだろう。

「場面」でいうと、実に六種の教科書が「楊修の死」（『演義』第72回）を採り最多、これに「赤壁の戦い」もの（同第48回から第50回あたり）が続く。これらは、『演義』の中では、教科書の定番であったと言ってもよいであろう。いわゆる「三顧の礼」の部分を採用する教科書は三種で決して多くは見えないが、管見の限り民国期中国語教科書が最も早く（1930年）採り入れたのはここであり、注目に値する。また開明書店の教科書が継続的に「孫策と太史慈の闘い」を採っていることも、その場面にいかなる意味を見出しているのか興味を引く。また上の表で見ると時期的にはだいぶ後になって出てきているのが「草船借箭」という、諸葛亮が意外な手段で敵から箭（矢）を獲得する場面である。先に挙げた『儒林外史』や『水滸伝』の特定の場面ほどではないが、いくつかの定番、選ばれた「名場面」があったようだということが見てとれる。

¹²⁾ いずれも『演義』の場合と同じ範囲（六十四種）の調査による。

¹³⁾ 1920年に商務印書館が刊行した『白話文範』第1冊に『儒林外史』から「王冕」・「郭孝子尋親記」が採られている。

¹⁴⁾ 1924年に中華書局が刊行した『新中学教科書初級国語読本』第2冊に『水滸伝』から「景陽岡」が採られている。

3. 「場面」別の分析

次に中学国語教科書の実際の内容を調べるが、「場面」の扱い方を検討するためには、作品のどの「回」が採用されているのかに即してゆくのが都合がよい。「回」の早い方から順次見ていくこととする。

(一) 第15回「太史慈酣鬪小霸王」¹⁵

③⑩⑬が採用。いずれも開明書店の教科書である。冒頭に「孫策……」を補いつつ第15回の「帶領朱治呂範，旧将程普黃蓋韓当等，」から、「太史慈跟着劉繇退軍」までを採る。父の孫堅亡き後袁術のもとにいた孫策が、自立して勢力を強め、劉繇と戦う。劉繇配下の太史慈と孫策との一騎打ちがこの回の山場となっている。

テキストは亜東版と大きな違いはない。但し、第15回本文のうち、太史慈と孫策の闘いに直接関連しない部分（孫策のもとに有力・有能な人物が投じてくるところ等）は大幅に省略されている。開明書店は③⑩⑬と三種類の異なる教科書でこの場面を採用し、いわば自社の「定番教材」としているが、省略箇所はすべて同一である。開明書店の国語教科書には一つ特徴があり、省略のある箇所には「……」と記している。省かれている部分を明示するのは、他社の教科書にはない措置である。

上のうち③には『開明国文読本参考書』という別冊の学習者用・教師用参考書があり、そこには「孫策太史慈神亭之戦」についての「解題」「詮釈」「敷演」「習問」が記されている。「解題」は『三国志演義』の作者と作品についての概略、「詮釈」は語句の注釈であるが、「敷演」の中にこの箇所についてのより詳しい解説があった。

これも戦争を叙述した文章であるが、前の三篇〔薛福成「巴黎觀油画記」・適夷「戦地の日」・冰心「一個軍官的筆記」を指す〕とは作風が大きく異なっている。この違いの原因はおよそ二つある。一、孫策と太史慈の激闘はそもそも古代英雄式の武芸比べであり、前三篇が述べる近代戦争とは違う。二、彼らの激闘は逆に後の

¹⁵ 採用箇所の確認に用いた亜東図書館の『三国演義』（1922年初版、1924年第3版）による。なお、この亜東版『三国演義』が底本とした「咸豊本」は毛宗崗本（120回本）である。また、亜東版では各回「第十五回 太史慈酣鬪小霸王 孫伯符大戰嚴白虎」といったように回目に二つの句が掲げられるのであるが、本稿ではそのうち「教科書に採用されている場面」に該当する方のみを見出しに示した。但し（七）に入る第49回はほぼ全編が含まれるので「七星壇諸葛祭風 三江口周瑜縱火」とすべて記している。

意気投合の予約券になるので、芝居仕立ての立ち回りは他の意識的あるいは無意識的な犠牲とはやはりおのずと異なる。だからこの文章は最初に孫策が兵を率いて劉繇を攻撃したと張英が迎え撃つのに失敗したことを述べ、最後に周瑜が曲阿を急襲して陥れたことと太史慈が劉繇に従って退却したことを述べはするけれども、孫策が神亭の嶺で敵陣の様子を探るところと太史慈が追ってきて互いに闘うところとに描写の重点がある。二人が勇ましく一対一で闘い、翌日は両軍陣前でそれぞれが強さをひけらかし勝ちを誇るこの中間部分が、全体の二分の一以上を占めるのである。孫策が劉繇を退けたということからすれば、もちろんこれは叙述文である。神亭の決闘からすれば、実は芝居仕立ての立ち回りを描いた記述文である。このことから、ふつう文章の分類では記述と叙述の両方を併せて「記叙文」と称するが、それはこれらの重複した内容に対応するためなのである¹⁶。

開明書店の教科書がこの「孫策太史慈神亭之戦」を国語教材として採った理由がここに示されている。「叙述文」や「記叙文」等といった文章の様式を学習させる素材として、比較的純粋に「文章」の価値によって「場面」の選定が行われていることがわかる。

(二) 第21回「曹操煮酒論英雄」

立達書局の教科書⑤が採用。この箇所は亜東版では「曹操煮酒論英雄」という名称だが、⑤では「青梅煮酒論英雄」となっている。なお「青梅煮酒論英雄」とするのは亜東版が基づく毛宗崗本とは別の版本（例えば毛宗崗本より前に成っていた李卓吾評本と称される諸版本）なのであるが、⑤のテキストを見る限りその文章は毛宗崗本の方と一致度が高いようである¹⁷。

場面は「一日、関張不在、玄德正在後園澆菜、」から「関張曰：『兄真高見！』」まで、劉備が曹操から酒席に招かれた一幕である。当世の英雄を論じる中で「いま天下の英雄

¹⁶ 王伯祥編『開明国文読本参考書』第1冊、開明書店、1932年、236頁。なお、「叙述文」と「記述文」がどう違うのかということだが、開明書店の『国文百八課』によれば「記述文——事物の形状や光景を記すもの」「叙述文——事物の変化経過を叙べるもの」だという。（夏丏尊・葉紹鈞合編『国文百八課』生活・読書・新知三聯書店、2008年、39頁。）また、引用中の〔 〕内は引用者（筆者）が補った語句であり、以下の引用でも同様とする。

¹⁷ この第21回の部分のみ、参照した亜東版『三国演義』に欠落がありテキスト対照ができなかったため、代わりに吉林文史出版社版『三国演義』（1995年初版、2006年第7次印刷）を用いて確認を行った。この吉林文史出版社版は、巻頭の「出版説明」によれば亜東版を復刻したものである。（但し、影印ではない。）

は君と私だけだ」と曹操に言われ、野心を見抜かれたかと焦るあまり箸を取り落とす劉備。折よく鳴り響いた雷に驚いたふりをして、曹操に警戒心を抱かせずにその席を何とか脱したのであった、という場面になる。

この場面を教科書に採ったものは⑤しかなく、当時この箇所が「名場面」として広く認識されていたとは言いにくい。また⑤には特に注釈や解説も付されておらず、この場面で教科書が何を学ばせたかったのかもはっきりしない。但し一点興味深いことを挙げておけば、⑤では、基づいた第21回「曹操煮酒論英雄」の中にある「後人有詩讚曰：勉從虎穴暫趨身，說破英雄驚殺人。巧借聞雷來掩飾，隨機应变信如神。」をそのまま掲載している。原作の中にある「後人」の「詩」は、教科書に採用される場合には省略（カット）されることが多いのであるが、ここはその例外にあたる。

(三) 第37回「劉玄德三顧草廬」・第38回「定三分隆中決策」

劉備が諸葛亮を迎え入れるべくその居所を三度にわたって訪ねた、いわゆる「三顧の礼」のエピソードである。今回の調査では最も早くに『三国志演義』を教材に採り入れた商務印書館の①が、劉備一行が一度目の訪問に出かける「玄德同関張并從人等來隆中、」（第37回）から三度目の訪問でようやく孔明と対面する直前の「又半晌，方整衣冠出迎。」（第38回）まで、三度の訪問の過程をすべて載せる。①は第37回で「後人」が臥龍（諸葛亮のこと）の居所を詠った「詩」と、やはり第37回にある「後人」による「詩」（劉備が風雪の中諸葛亮を訪ねたことを詠うもの）を省略している。また①は原作の第37回と第38回にまたがるため、第37回末尾の「正是：高賢未服英雄志，屈節偏生傑士疑。未知其言若何，下文便曉。」という部分と、第38回冒頭の「却說玄德訪孔明兩次不遇，欲再往訪之。」という部分を省略している。

この箇所を採ったものとしては他に立達書局の⑤と世界書局の⑦がある。⑤は第37回の「三人回至新野，過了數日，玄德使人探聽孔明。」から「正值風雪又大，回望臥龍岡，愜快不已。」まで、雪の中諸葛亮を訪ねたが結局会えずに終わった二度目の訪問の部分載せる。⑦は第38回冒頭の「却說玄德訪孔明兩次不遇，欲再往訪之。」から「終日共論天下大事。」まで、三度目の訪問で劉備がついに諸葛亮との面会を果たし、天下三分の計を聞いて、諸葛亮を陣営に迎え入れるに至ったところまでを記す。①と比べると、⑦では三分の計をめぐる劉備と諸葛亮のやりとりが中心に来ていることがわかる。なお⑦でも、「後人」の「詩」二つと「古風」（詩）一つが省略されている。

①⑤は教科書に注釈・解説は特にないが、⑦は語句についての「注釈」の他に、「参

考」、「表解」を伴っている。「表解」には、「本篇の内容——玄德が孔明を訪問した様子・孔明が高臥して起きぬ様子・玄德と孔明が相見えた後の様子——を叙述している」とある¹⁸。

(四) 第43回「諸葛亮舌戦群儒」

開明書店の③が採用。第43回「諸葛亮舌戦群儒」の「魯肅孔明辞了玄德劉琦」から「就送孔明於館駅安歇。」まで。題名通り諸葛亮が孫呉の文官・論客と次々に舌戦を繰り広げ（すべてで相手を言い負かし）、最後には呉の主孫権に説いて曹操との対決を決意させるという一段である。「赤壁の戦い」の前段として諸葛亮の見せ場の一つに数えられるこの場面、呉の「群儒」の発言・挑発とそれへの諸葛亮の応答を③は省略なく掲載している。

教科書自体には注釈・解説は付いていないが、別冊の「参考書」では「敷演」として次のような記述がある。

これは『三国演義』の中で諸葛亮の才知を最も素晴らしく描いた部分である。これほど長い対話で、論難に加わる者も一人にとどまらないうえ、討論の中心は曹操に降伏するか否かだけなのであるから、重複を避けようとするのもおそらく決して容易ではないだろう。〔中略〕それをここでは悠然と描き出して、むりやりなところやあからさまなところがまるでない。それでいて各人の身分や口ぶりは生き生きとされていて、読む者がまるで傍でじかに聞いているかのように真に迫っている。これはいったい何とみごとな描写であろうか！¹⁹

この場面について、ともすれば重複・反復に陥りそうなところを、しぜんに描き分け、リアルに仕上げている点を高く評価しているわけである。作品に対するこうした正面からの肯定的評価は、『演義』に関する限りなかなか珍しい。

(五) 第45回「群英会蔣幹中計」

大東書局の⑥と国定中小学教科書七家聯合供応処²⁰の⑮が採用。いずれも第45回「瑜欲親往探看曹軍水寨」から「周瑜大喜曰：『吾所患者、此二人耳。今既剷除、吾無

¹⁸ 『朱氏初中国文』第5冊、410頁。なお教科書の編者・出版社・刊行年については、前掲の〔表〕を参照。これ以降も同様とする。

¹⁹ 王伯祥編『開明国文読本参考書』第2冊、開明書店、1933年、222-223頁。

²⁰ 「七家」とは、正中書局・商務印書館・中華書局・世界書局・大東書局・開明書店・文通書局の七社を指す。

憂矣。』まで。「赤壁の戦い」前哨戦的一幕で、曹操の命を受けて呉の都督周瑜のもとを訪れた蔣幹が主に描かれる。蔣幹は周瑜を説得して曹操の側につかせる目的でやって来たが、予めそう察知していた周瑜にはあっさりあしらわれる。それでも呉の軍中の様子を探ろうとする蔣幹は、周瑜のもとにあった蔡瑁（曹操のもとで水軍を統括していた）の手紙を発見、曹操に届けるべく呉の陣中を抜け出すが……という物語。⑮の巻末には「附録」という解説欄があるが、「第十三課 群英会」の「題解」中に「全篇〔周〕瑜の機知と狡猾さが描かれ、〔蔣〕幹を手玉にする」²¹とある。もう一方の⑥は篇末に語釈を載せる他、本文の前に作者と作品（テキスト）についての解説を付し、そこで『三国志演義』の進化の歴史については、胡適『『三国志演義』序』と魯迅『中国小説史略』がともに詳しい考証を行っており、参考になる」²²と記す。同時代の研究成果を生徒・学生に紹介しているのは珍しい。

テキストは、亜東版とわずかに異なるところを有する程度である（⑥と⑮とで、「異なる」部分には差もある）。両者とも亜東版と標点や分段がほぼ同じであることにも注意してよいであろう。

この「群英会」の教科書本文で特徴的なのは、他の場面の教材化においては削除されることの多い「後人」の「詩」がそのまま残されている点である。具体的には、引用場面の終盤、周瑜の計にかかったことを曹操が悟ったところで現れる「後人有詩嘆曰：曹操奸雄不可当，一時詭計中周郎。蔡張売主求生計，誰料今朝剣下亡？」が残されている。（但し⑥⑮は「生計」を「榮計」としている。）

（六）第46回「用奇謀孔明借箭」

民国末期の教科書⑰⑱で登場。第46回「用奇謀孔明借箭」の中から、⑰は（冒頭に「周瑜」の二字を補って）「聚衆將於帳下，教請孔明議事。」から「追之不及，曹操懊悔不已。」まで、⑱は（やはり冒頭に「周瑜」の二字を補いつつ）「請孔明議事。」から「追之不及。」（最後に一字独自に加え「不及矣。」とする形になるが）までをそれぞれ採る。両者はほぼ同じ箇所を載せているが、文字（字句）の細部を見比べると異なっている。

²¹ 『初級中学国文甲編』第1冊、94頁。

²² 『新生活初中教科書国文』第1冊、67頁。

るところがあり、特に⑱の方は亜東版とはやや異同が目立つようである²³。

一方両者に共通する点もあり、魯肅（子敬）が周瑜（公瑾）の依頼で諸葛亮の様子を探りに来た時に諸葛亮（孔明）の言ったセリフ、「吾曾告子敬，休对公瑾説，他必要害我。不想子敬不肯為我隱諱，今日果然又弄出事來。三日内如何造得十万箭？子敬只得救我！」の内、前半の「吾曾告子敬，〔中略〕今日果然又弄出事來。」の部分が省略されている。また両者ともに、「前人」による「大霧垂江賦」（亜東版では十四行にのぼる長さのもの）²⁴をまるごと省略している。

物語は、「赤壁の戦い」の決戦直前の場面。水軍戦に必要な「箭（矢）」の調達に協力するよう周瑜に頼まれた諸葛亮は、「三日以内に十万本の箭を提供する」と豪語する。できなければ甘んじて罰を受けると言う諸葛亮に、心中彼を敵視しており亡き者にしようと考えていた周瑜は喜ぶが……という筋立てである。知識と知恵を活かして「十万本の箭」を短い間に獲得する諸葛亮、周瑜と諸葛亮の間で気をもむ魯肅、優れた兵法家であるばかりにかえって一本取られる曹操等、『演義』の主要登場人物が何人か揃う場面である。⑰の方には注釈や解説はないが、⑱の方は「注釈」で羅貫中と『演義』の基本情報を提供し、更に「参考」として次のように記す。

本課は章回小説の『三国演義』から抜粋している。周瑜が孔明に箭を造るよう頼んだところから、成功裏に箭の借用を遂げるところまでである。話の筋は生き生きとされていて、出来事の展開は一步また一步と張りつめて人を引き込む。「丞相箭をありがとう」のところなどはまことに晴れやかで気持ちのよい文章で、人を爽快な気分させる。文中の人物は、孔明は機知に富み冷静に事の見通しを持ち、周瑜は猜疑心と妬みが強く、魯肅は温厚誠実にして道理をわきまえており、というふうに個性が紙の上に生き生きと表現されている²⁵。

人物の個性が表現されている、という記述が興味深い。というのも、『三国志演義』はこの点が弱いとしばしば指摘されてきたからである。このことには後でまた触れよう。

²³ 例えば魯肅が諸葛亮に語ったセリフ「公自取其禍，我如何救得你？」（亜東版）が⑱では「公自取其禍，我有何辦法？」となっていたり、諸葛亮が船の方向を転換させる場面「孔明教把船弔回，頭東尾西，逼近水寨受箭，一面擂鼓呐喊。」（亜東版）が⑱では「孔明又叫把船掉個頭東尾西，換面受箭。」となっていたりする他、細部の用字の違いが相当数ある。⑱の方は、話の展開を変えたり原文の風格を失わせたりするほどではないとはいえ、編者が原文に若干手を入れている可能性がある。

²⁴ 汪原放句読『三国演義』亜東図書館、1924年第3版、第46回4-5頁。

²⁵ 『初中国文』第2冊、139頁。

(七) 第 48 回「鎖戦船北軍用武」・第 49 回「七星壇諸葛祭風 三江口周瑜縱火」・第 50 回「諸葛亮智算華容」

いわゆる「赤壁の戦い」の本体を描いた箇所である。南京書店の②、世界書局の⑦、中学生書局の⑧、国定中小学教科書七家聯合供応処の⑬の四種が第 48 回「次日、水軍都督毛玠于禁詣帳下、」から第 50 回「曹軍着鎗中箭、火焚水溺者、不計其数。」までを採り（但しいずれも書き出しを「一日、」と改めている）、大華書局の⑨は第 49 回「却説曹操在大寨中、」から第 50 回「原来却是李典許褚保護着衆謀士来到。」までを採る。またこれらとは別に⑬が第 45 回から第 50 回までの内容をごく簡潔にダイジェストにしたものを載せている（原作『三国志演義』の文章ではない）。すなわち、「赤壁の戦い」を扱ったものに三種類あるということである。三つ目のもの（⑬「赤壁之戦」）は梗概であり、筆者が目にした復刻版でもわずか一頁で終わってしまう²⁶。文言（文語）で書かれている点が特徴であるくらいで、小説『三国志演義』を教材にしたものとは言えないので、ここではこれ以上触れない。

残りの二種について順に見ていこう。まず、より長い②⑦⑧⑬についてである。これらは、まず曹操が自らの水軍を鎖でつないだ船団に作り変えた（龐統の「連環の計」による）ところから始まる。曹操の陣営からは敵を攻撃したいと願う者が出て周瑜軍との交戦となるが、この初戦は周瑜側の勝利に終わる。ところが、その勝利も東の間、周瑜は自らの作戦に足りないものがあることに気づき、倒れてしまう（ここまで第 48 回）。倒れた周瑜の見舞いに来た諸葛亮は、周瑜が求めるものが「火計に必要な東南の風」であることを見抜き、祈祷により風を呼んで協力する、と申し出る。諸葛亮は「七星壇」という祭壇を築かせ、風を呼ぶ準備に入る。周瑜が呉の陣営の準備を進めていると、ついに念願の「東南の風」が吹き始める。周瑜はここで、諸葛亮の恐るべき力は後日呉の脅威となるからその前に始末をと、配下の武将をやって諸葛亮を害そうとする。諸葛亮はあらかじめそれを見越して脱出の手立てを講じていたため、これは失敗に終わった。周瑜は曹操との対決に意識を切り替え、武将たちの配置や攻撃手順を細かに指定する。ちょうどそのころ劉備の陣営では、戻って来た諸葛亮が曹操の敗走を見越してその退路を断つための兵の配置を進めていた。更に曹操の陣営では、呉の有力武将黄蓋がかねての連絡通り投降してくるとの情報を得、勝利を確信する。さて決戦当日、火種を積んだ黄蓋の船団が曹操の油断に付け込んで寨に近づき、曹操の船団を火だるまにする。黄蓋

²⁶ 葉聖陶等合編『開明新編国文読本』（乙種本）経済日報出版社、2000年、45頁。

の投降は偽りだったのだ。慌てて逃げる曹操を黄蓋が追うが、曹操を守っていた張遼に射られ、江に落ちた（ここまで第49回）。黄蓋は仲間の韓当に水中から救い上げられ、一命をとりとめる。曹操の陣営は焼き尽くされ、水に溺れたり槍や矢に当たったりするものも数え切れぬありさま。これが「三江水戦、赤壁鏖兵」であった（ここまでが第50回から。原作の第50回は更に続きがある）。

教科書に採られている『演義』の場面としては格段に「長い」ことがまずわかる。原作でも第48回から第50回に及ぶため、回をまたぐところでの省略が当然含まれる。まず第48回末の「正是：一時忽笑又忽叫，難使南軍破北軍。畢竟周瑜性命如何，且看下文分解。」及び第49回あたまの「却説周瑜立於山頂，觀望良久，忽然望後而倒，口吐鮮血，不省人事，」までが省略され、第49回末は「正是：火厄盛時遭水厄，棒瘡愈後患金瘡。未知黃蓋性命如何，且看下文分解。」が省略される。『三国志演義』や『水滸伝』のような章回小説は各回の末に読者の興味を持続させる工夫を施し、「この後は一体どうなりますか、それは次回をご覧ください」といった調子で結ぶのが固有の様式となっているが、国語教科書ではその様式は踏襲していないということである。一続きの読み物（散文）として読むべき、いわば現代の感覚における「小説」に近い形へと改編を施していることになる。これはすでに見た（三）でも同様であった。

またこれも他の場面の場合（例えば（三）のケース）と同様であるが、「後人」の「詩」の部分が省略されている。第49回で周瑜が丁奉と徐盛に諸葛亮を追わせる場面が出る「後人有詩曰：七星壇上臥龍登，一夜東風江水騰。不是孔明施妙計，周郎安得逞才能？」がカットされている。分量としてさほど多いわけではないから、この省略は紙幅の都合というよりは、読み物としての流れを妨げかねないもの（韻文、それもさほど出来のよくないもの）を削ることによって小説として読みやすく整理する狙いに基づいているとみてよいだろう。

また、省略があるのは回をまたぐ箇所だけではない。第49回では「話分兩頭。」から「留孫乾簡雍守城。」まで、亜東版で正味約三頁近くにあたる分²⁷が②⑦⑧⑬すべてで省略されている。この箇所は、先のあらすじでいうと「劉備の陣営では、戻って来た諸葛亮が曹操の敗北を見越してその退路を断つための兵の配置を進めていた」の部分に該当する。この部分は、教科書では採用が及んでいない第50回の後半「関雲長義釈曹操」を読むための伏線としては実は重要なのであるが、周瑜・曹操・諸葛亮の互いの知恵の

²⁷ 汪原放句読『三国志演義』亜東図書館、1924年第3版、第49回8-11頁。

闘いと呉軍の奮戦を描く第 50 回前半までの部分には直接関係しない。したがって、教科書に限られた枠の中で一個の物語を提示しようとする際にはこの箇所はやはり脇道であると判断され、削られたのであろう。

これに加え⑤では更に、やはり第 49 回の「乃笑曰：『先生已知我病源，将用何藥治之？事在危急，望即賜教。』」から「却並不見有東南風。」まで（亜東版で約一頁半）²⁸、「瑜駭然曰：『此人有奪天地造化之法，』」から「魯肅曰：『且待破曹之後，却再図之。』」まで（亜東版で約二頁弱）²⁹を省いている。前者は諸葛亮が「七星壇」を築かせ風を呼ぶくだりの詳細、後者は諸葛亮が東南風を呼んだことに恐れをなした周瑜が彼に追っ手を差し向けた一段である。これらは周瑜と諸葛亮の知恵比べが見どころではあるが、「赤壁の戦い」の大きな流れの中ではやや余談的である。⑤は、②⑦⑧以上の省略を施すことで更に読み物としてすっきりさせようと試みた、と見ることもできそうだ。

次に短い方の⑨であるが、採用箇所は前述した通り第 49 回後半から第 50 回前半までである。物語としては、曹操の陣営が黄蓋「投降」の報を受けるところから決戦の当日を描く。②⑦⑧⑩は曹操軍が大打撃を受けたというところで切っていたが、⑨は更に先を続ける。②⑦⑧⑩のラスト「不計其数。」に続く「後人有詩曰：魏吳争闘決雌雄，赤壁楼船一掃空。烈火初張照雲海，周郎曾此破曹公。又有一絶云：山高月小水茫茫，追數前朝割據忙。南士無心迎魏武，東風有意便周郎。」から、「原来却是李典許褚保護着衆謀士来到。」まで、曹操が呉の諸將に迫われ劉備配下の趙雲に行く手を阻まれながら、命からがら逃げ伸びる場面までを含んでいる。（関羽が曹操を義によって見逃す「関雲長義釈曹操」はこの後にくるが、そこまでは含めていない。）なお、第 49 回と第 50 回の境目については、②⑦⑧⑩と同じ措置をとっている。但し「後人」の「詩」を削除していない点からすると、⑨は②⑦⑧⑩ほど意識的にはテキストを改編しようとしていないのかもしれない。

テキストについては、まず⑨が亜東版とほぼ完全に一致している。②⑦⑧⑩もそれぞれ一部の用字と標点・分段において異同はあるものの、亜東版と内容や字句上の大きな違いはない。

さて、教科書の注釈等はこの文章をどう説明していたか。やや詳しく「参考」を付けているのが⑦で「本篇は小説体の叙事文である。内容は三国時代の火烧赤壁の一段の戦争故事を叙述したものである。まず曹操が軍を進めたこと、次に孔明が祈って風を呼ん

²⁸ 同上書、第 49 回 2-4 頁。

²⁹ 同上書、第 49 回 5-7 頁。

だこと、それから赤壁での激戦を述べて、火烧赤壁〔赤壁を焼く〕に至った経過を明らかにする。』³⁰ という解説が付いた。更に一步踏み込んで述べているようなのが⑮で、巻末「附録」の「第九課 火烧赤壁 題解」の中に、こう出てくる。

敵対する両軍を極めて生き生きと描写しており、周瑜の機智や軍隊の奮戦が、この千古に名のとどろく殲滅大戦を作り上げている。〔中略〕章回小説は、一段の初めごとに回目を加えて標題とするが、おそらくこれは小説評話に都合がよかったからであろう。ここでは回目は削除してある³¹。

回目（例えば「七星壇諸葛祭風 三江口周瑜縱火」）を削除していることの説明が最後にあるのが注目される。「評話」とあるのは、講師師が物語を聴衆に語る芸能のことである。ここでは『三国志演義』の物語がそうした語り物芸能の中で発達・発展してきたものであることを踏まえ、そうした芸能においては各回標題を掲げることが有効であった（が、現代の教科書ではその必要性は乏しい）ということ述べている。これを見るに、『演義』に若干の改編が加えられたのは、やはり「読む」物語としての小説の形に近づけることが狙いであったようである。

（八）第 72 回「曹阿瞞兵退斜谷」

商務印書館の④、中華書局の⑫、開明書店⑩⑯、その他にも⑪⑭と計六種類の教科書で採用が見られる。⑪が「楊修」とする他がすべて「楊修之死」としていることからわかるように、楊修という知恵者の部下が曹操の怒りに触れ斬罪に処せられるという話である。この話は大きく分けると二つのパートからなる。前半は、漢中奪還のため劉備を攻撃するも苦戦し、退却すべきか悩む曹操が発した「鶏肋」という言葉の解釈をめぐる楊修が遂に斬罪に処せられる一段である。後半は、生前の楊修と曹操のエピソードが回想的に綴られる。才気に溢れるあまり曹操の意を害する行動を重ねる楊修が描かれ、次第に怒りを募らせた曹操によって楊修は「いまついに軍心を乱したという罪で殺されたのだ」と結ばれる、叙述の時系列という点でやや珍しい構成の部分である。上の六種の内、⑯は前半部分すなわち第 72 回「曹阿瞞兵退斜谷」の「操屯兵日久，欲要進兵，」から「将首級号令於轅門外。」までとなっており、その他④⑩⑫⑭は前半・後半を含む「操屯兵日久，欲要進兵，」から「今乃借惑乱軍心之罪殺之。」までとなっている³²。

³⁰ 『朱氏初中国文』第 5 冊、442 頁。

³¹ 『初級中学国文甲編』第 1 冊、84 頁。

³² ⑪については、注 10 に記した通り目次しか見ることができていない。ただ『三国志

なお、各教科書はそれぞれに亜東版と若干の字句の異同を有しているものの、やはり大きな違いはない。

既に見た通り、④⑩⑫⑭は原作から「同じ箇所」を抜き出して教科書本文としている。ある意味で定番教材化したと言えるが、なぜこの箇所が国語教材として適しているのかは、必ずしも明示されているわけではない。最も早い④は本文の後に「作者」「注解」「暗示」を付すが、その「暗示」が「本篇の後ろの方に過去のことを五つ述べた部分があるが、いずれも「説明」的性質に属するものである³³と述べるのが目に留まる程度である。⑫と⑭は、本文後に「題解」「作者生平」「注釈」「習題」を持つ³⁴が、作品のあらすじや作者羅貫中についての説明を除けば、「習題」に「(一) 楊修はどんな人だろうか？ (二) 楊修が殺された原因はどこにあっただろうか？ (三) 本篇とその前の数篇³⁵を比較すると、文章の作り方の点でどんな違いがあるだろうか？」³⁶とある。これらから察するに、「楊修之死」のポイントは、後半に「追叙」(時間の順序を入れ替えて、後から過去のことを述べる)があることだったのではないかと考えられる。歴史的な事実を学んだり、道徳的な教訓にしったりといったことではなく、比較的純粋に文章の書き方の参考例とみなされていたという点では、やはり「歴史」や「道徳」ではなく「国語」の教材であった。

演義』で「楊修」が題目となり得る箇所はおそらく第72回のこの部分のみであろうということから、この群に含めている。

³³ 『復興初級中学教科書国文』第2冊、167頁。

³⁴ 実は⑫と⑭はテキストの組み方(標点符号を施す代わりに句や文の切れ目にスペースを空けるという独自の体裁)から本文後の「題解」「作者生平」「注釈」「習題」の構成及びその記述に至るまで、完全に同一内容と言えるものである。⑫は1937年3月に上海の中華書局が刊行したものの、⑭は1939年12月に北京(日本軍占領下)の教育総署編審会が刊行したものであるから、⑭が⑫を踏襲或いは剽窃したと見るのが自然だろう。なお⑭の印刷発行を受け持ったのは新民印書館であるが、黄漢青「新民印書館について」(『慶応義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』41号、2009年)によれば、「新民印書館は、設立要項に『中華民國政府編纂の教科書の翻刻発行』並びに『日本軍部及中華民國各官庁刊行物の出版其他』をおこなうとの記載があり、中国侵略戦争を推し進める日本軍部の一翼を担う国策会社としてスタートした」という。

³⁵ 目次によると、「楊修之死」と同じ「第四組」に入っているのは司馬遷「田单以火牛攻燕」・司馬光「郭子儀单騎退敵」・司馬遷「信陵君救趙」である。

³⁶ 『新編初中国文』第4冊、85頁。また『初中国文』第4冊、67頁。

(九) 第 74 回「関雲長放水滄七軍」・第 75 回「関雲長刮骨療毒」

開明書店の③が採用。物語は、曹仁との戦いで毒矢を受け負傷した関羽のもとを名医華佗が訪れ、外科的な手術を施して治すという一幕である。主要部分は第 75 回「関雲長刮骨療毒」であるが、関羽が負傷するに至った経緯を記す第 74 回「関雲長放水滄七軍」末の部分も含んでいる。

まず、第 74 回の「関公自擒魏将于禁等、」から（一部省略もあるが）「右臂上中一弩箭、翻身落馬。」までが載り、次に第 75 回の「曹仁見関公落馬、即引兵衝出城来；」から「以敷瘡口、辞别而去。」までが続く。回をまたぐ引用の例に漏れず、第 74 回末尾の「正是：水裏七軍方喪膽、城中一箭忽傷身。未知関公性命如何、且看下文分解。」と、第 75 回冒頭の「却説」は省略されている。更に、「後人」の「詩」（ここでは、華佗による大手術が成功した後に掲げられているもの）がすべて省略されている。

教科書本体には注釈等はないが、『開明国文読本参考書』には本篇「関羽刮骨療毒」についての解説類があり、その「敷演」に「関羽の本伝中の若干の言葉を敷衍してこのような一篇としたものである。そして初めと終わりが明瞭なうえ順序も整然としており、まさに英雄故事中の悲壮なる一級品である」³⁷とある。「本伝」とは、陳寿による歴史書『三国志』「蜀書・関張馬黄趙伝第六」で、流れ矢に当たって傷んだ肘を関羽が医者に切開させて治したという記述がたしかにある。但し、そこには医者とあるだけで華佗ではなかったし、矢で傷ついた肘も左肘であった³⁸。（『演義』では右肘を手術している。）「敷演」が指摘するように、『演義』は歴史書に基づきながら巧みに手を加え、劇的な場面に作り変えているわけである。この箇所を選んだ教科書は一種類しかないが、開明書店の他の教材の場合と同様、文章の書き方あるいは作られ方に重点を置いた「場面」の選定だったとみてよいだろう。

(十) 第 85 回「劉先主遺詔託孤児」

世界書局の⑦が採用。夷陵の戦いで敗北して白帝城へ退き、病を発した劉備が後事を諸葛亮に託す場面である。⑦では第 85 回「劉先主遺詔託孤児」の「且説孔明到永安宮、見先主病危、」から「陞賞群臣、大赦天下。」までの部分を載せる。劉備が諸葛亮へ託した内容、劉備の遺詔など『演義』の文章がそのまま記されるが、唯一杜工部（杜甫）の

³⁷ 王伯祥編『開明国文読本参考書』第 1 冊、開明書店、1932 年、296 頁。

³⁸ 陳寿著・井波律子訳『正史三国志』5（ちくま学芸文庫）筑摩書房、1993 年、169 頁。

「詩」³⁹のみ省略されている。「後人」の「詩」を除去する作法は、杜甫ほどの大詩人の作に対しても適用されていたというのは興味深い。

教科書⑦は本文の後に「参考」を付すが、そこには「本篇は小説体の叙事文である。内容は昭烈帝が死の間際に死後のことを託した一段の故事を述べるものである」⁴⁰とある。またこの教科書特有の「表解」では「本篇の内容——劉先主が死後のことを託した様子・孔明が遺詔を従い守った様子——を叙述している」⁴¹とまとめている。

4. おわりに——「名場面」の選定とその論理

些か細かい部分にもわたったが民国期中学国語教科書中の『三国志演義』について見てきた。今回の調査は、以前はほぼ目次から題名を拾い上げる程度にとどまっていたところを、実際の中身を見ていくことによって教科書本文の採用の仕方やその選定意図及び作品評価に迫ることが狙いであった。すでに各部分で述べていることもあるが、以上の内容整理からわかることを簡単にまとめておきたい。

第一に、作品を「国語教材」として見る姿勢がはっきりと見られることである。(一)が文章の様式を学ばせる意図で選ばれていたこと、(四)や(六)等が人物の描き方等文章表現の巧みさを称えていたこと、人気教材の(八)は「追叙」という方法に注意が向けられていたこと等、「国語」(言語、文芸)の観点から場面の選定と評価が行われていたことが確認できる。

胡適はかつて、『三国志演義』は文学作品とは言えない、通俗歴史として大きな魔力を有するのみだと指摘した。彼は、『三国志演義』は多くの学問の機会の無かった人々に常識や知恵を授け、手紙や文章の書き方を教え、身の処し方世の渡り方を学ばせてきたのであり、その点にこそ価値があるとしていた⁴²。しかし中学用教科書への採用の様相を見るに、ここではその見解からの脱却が図られている。つまり、『演義』はもはや「道徳」や「歴史」の教材ではなく、遂に「国語」の教材になったのである。『演義』という白話小説が、白話(語体文)を中心とする近代国語教育に資する「文学」の一部と

³⁹ 「蜀主窺吳向三峽，崩年亦在永安宮。」に始まるこの七言律詩は、杜甫「詠懷古蹟五首」の「其四」として知られるものである。(但し通常「向」ではなく「幸」とされる。)

⁴⁰ 『朱氏初中国文』第5冊、416頁。

⁴¹ 同上書、417頁。

⁴² 胡適「『三国志演義』序」、汪原放句読『三国志演義』第1冊、亜東図書館、1924年第3版、胡序11-12頁。

して認められたということ、このことがまず重要であろう。

第二に、国語教材としての最適化が図られているということである。学校教育（国語）の教材としては、もとの文芸作品をそのまま載せるだけでは適切ではない、という認識があったことは明らかである。（七）に関連して回目の削除という措置が意識的に取られていたことは見たが、まさにその回目の除去や不要と考えられる部分の省略、原作にしばしば入り込んでいる「詩」（韻文）のカットなどは、単なる短縮以上の意味を持っていた。ひとまとまりの散文作品として読みやすく（また教えやすく）改編するという行為は、純粋に古典文学の保存と伝承を志向する立場からは望ましくない処置にも思えようが、教育上の配慮としては一定の意義があったと見るべきであろう。結果的に生徒たちは、原作よりも近代的な小説に近いスタイルによって作品に触れることになっていたのである。

第三に、その一方で本文自体は実は大きく手を入れられることなくほぼ保存されていたということがある。すでに見たように、テキスト（本文）については、省略はあっても改変（書き換えやダイジェスト化）は基本的に無かった。生徒・学生の読みやすさに配慮したといっても、リライトはほぼ行われなかったという点は注意しておいてよい。これは第一の点に還ることにもなるが、初級中学の国語教科書では極力、作品の言語芸術としてのあり方を知らしめようという意図があったということになるだろう。これは、初級小学用の国語教材では児童が物語を理解できることを優先して「易しく書き換える」⁴³が多かったのとは、対照的である。

以上によれば、中学校の国語教材に取り込まれることによって、『三国志演義』は文学作品としての価値を捉え直される機会を得たのだということになるだろう。特に注目されるのは（四）③や（六）⑱で、その「場面」についてという限定付きにはなるが、『演義』の表現技法や描写力への肯定的評価が行われていた。

当時出ていた文学史または小説史を紐解くとわかるが、『演義』の文芸的価値はほとんどの場合低く見られていた。例えば、魯迅の『中国小説史略』にも先行した日本・塩谷温『支那文学概論講話』（1919年）は次のように述べていた。

胡応麟も亦大に三国志に不満足であります。實際水滸伝とは較べものになりませぬ。

⁴³ 例えばある初級小学用国語教科書には「火焼赤壁」という文章が載るが、これは「曹操帶領八十万人馬，想奪取江南地方。東吳周瑜帶着三萬人抵抗他。兩軍在赤壁地方隔江屯紮，曹操在北岸，周瑜在南岸。」というリライトされた文章から始まる。（教育総署編審会『初小国語教科書』第8冊、教育総署編審会、1941年、51頁。）以下もリライトされた文章が続く。

東坡志林にいふ通り、誰しも劉玄徳に同情を有し曹操に悪感を抱くのでありますが、本書に於ては奸雄曹操の面目は躍如として、寧ろ天真爛漫愛すべきものとなり、謙虚賢を重んずる玄徳は偽君子に近く、忠亮貞節の諸葛孔明は却て権謀に富める策士と成り了れる感がするのは、要するに鼯鼠の引き倒しであります⁴⁴。

このような、『水滸伝』には及ばないという評価は常に付いて回ったし、とりわけ人物・人間をうまく描けていないということはこの小説の弱点としてしばしば指摘されていた。そのことを踏まえると、③が「各人の身分や口ぶりは生き生き〔中略〕真に迫っている」、⑧が「個性が紙の上に生き生きと表現されている」等としていることがとりわけ印象的に見えてくる。

いま文学史ということに触れたが、ほぼ最初期の中国文学史として知られる H.A. ジャイルズの *A History of Chinese Literature* (1901) が『演義』からの場面紹介として最初に挙げたのが、実はまさにこの「草船借箭」の部分であった。ジャイルズは、“This is how the great commander Chu-ko Liang is said to have replenished his failing stock of arrows. [中略] The latter did so, and kept on for an hour and more, until Chu-ko Liang was satisfied with what he had got, and passed the order to retreat.”⁴⁵ と、英文による要約ではあるがおそらくほぼ世界で初めて、文学史の中で『三国志演義』の場面を紹介していたのである。その「場面」が、約半世紀を経て今度は中国語原文についての文学的評価付きで学校教材に採用されたということは、『演義』評価をめぐる時代の遷り変わりを象徴しているようで興味深い。

さて、実はまだ残されている課題もある。上で少し触れた文学史・小説史の問題もそうであるし、教科書ということに関しても、古文教材としての側面の検討や小学教材との比較等まだ補う必要のある点が存在する。紙幅の関係もありここでは展開できないが、いずれ機会を改めてまとめることとしたい。

(おおはし よしたけ 本学専任講師)

⁴⁴ 塩谷温『支那文学概論講話』大日本雄弁会、1919年、485頁。

⁴⁵ Herbert A. Giles, *A History of Chinese Literature (Short Histories of the Literature of the world: X. edited by Edmund Gosse, LL.D.)*, London; William Heinemann, 1901, p.277.